

## 7) 有明海区

古代、諸国の統治が進むとともに、国内交通も整えられ、五畿、七道を定め、諸国の国府とを結んで幹線路を整えたが、九州では主要幹線として西海道が制定された。平安時代後期頃（1077～1192年）より西海道に沿った有明海は、国内海運はもとより対外的に日宋貿易の海上の路として、太宰府と薩摩、南西諸島、琉球とを結んで中国に通じる海のバイパスとして利用されていたが、当時、西海道の一駅として諫早（船越）が陸路、水路の要衝の地として歴史上に登場している。

この海区は長崎、佐賀、福岡、熊本などの4県に囲まれており、島原半島西部の国見町と熊本県北西部の長洲町とを結んだ線より以北の有明海と以南の島原湾との二つの海域を含み、奥部の諫早湾は、昭和27年（1952年）長崎大干拓構想がでて以来、紆余曲折を経て昭和63年（1988年）、農林水産大臣の埋立申請を長崎県知事が承認してから、諫早湾奥の漁業は消滅した。

有明海は湾奥にあたるので、島原湾水の影響が少ない内湾性海域で、遠浅の干潟が広がり、干満差が5～6mと大きい。一方、島原湾は外海水との関連性が強く、外海水は野母崎から橘湾を通り、島原半島に沿って沿岸水と混じりあいながら北上するが、島原半島の東側に達する程度である。

落潮最盛期の南下流は、湾奥部で1ノット、国見、島原、貝崎の島原半島寄りで2.5～3.3ノット、その沖合で1.6ノット、貝崎から口之津間で3.3～4.0ノット、湾口の口之津や早崎瀬戸で5.3～6.5ノットと、潮流の早い海区である。なお、この海区は、島原市と南高来郡は途中若干の交替期があったが、寛文9年（1669年）より明治2年（1869年）まで松平氏が、神代、諫早、小長井は鍋島氏が支配していた。

表3.1、3.2より、有明海区はその他の敷網が8海区中1位、ひき寄せ船びき網（吾智網）、その他の漁業が2位、その他の刺網、採貝が3位を占めている。

表3.10よりこの海区で主も経営体数の多いものはその他の釣で、全体の31.1%、その他の刺網22.8%、採貝19.3%、その他の漁業9.2%となり、これらの4漁業種で82.4%となる。次いで漁獲量からみると、総漁獲量6,659トンのうち、イカ釣2,196トン（総漁獲量の33.0%）、採貝1,064トン（同16.0%）、はえ縄920トン（同13.8%）、その他の漁業720トン（同10.8%）、その他の刺網712トン（同10.7%）と、これら5漁業種で84.3%を占めている。しかし、経営体数の中で、その他の敷網が8海区中の1位になっているのは、本漁業が8海区全般で操業されている漁業でなく、北松海区と有明海区に集中した結果で、同様に、ひき寄せ船びき網（吾智網）も、8海区中2位になっているものの、許可統数と操業海域が限定されていることから、その他の敷網と同じ結果を示している。

また、イカ釣は有明海区を離れて壱岐・対馬海区まで出漁しており、はえ縄も東シナ海に出漁しての漁獲であるので、改めて、この海区を特徴づける漁業としては、採貝漁業、その他の刺網漁業（流刺網、底刺網）、その他の漁業（かご、つぼ）などがあげられる。

この海区は、栄養豊富な沿岸水と、外洋水との混合によってプランクトンが多く、タコ類、イカ類、エビ、カニ類などの底棲生物が育つ漁場環境にあり、沖合域は砂泥底質で水深も浅く平坦で、干満差が大きく潮流が早い。沿岸域は遠浅の砂浜海岸が続き、貝類の棲息に適していることから、採貝漁業、タコ類、イカ類、カニ類のかご、つぼ漁業と、潮流の早さを利用した流刺網、特にクルマエビを対象とする源式網、潮流を受けて魚を待つて獲るその他の敷網に属するアンコウ網など、海底底質と潮流を利用する漁場環境に適合した漁業が、本海区を特徴する漁業になったものと考えられる。

表3.10 平成7～10年の4年間の平均経営体数と対象魚種（有明海区）

漁業種類	年度	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	4ヶ年平均	全体に占める%	4ヶ年平均の漁獲量	主な対象魚種（トン）	備考
地びき網										
ひき寄せ船びき網		13	14	17	16	15	1.3	445トン(6.7%)	ニベ(204) マダイ(45) イカ(30) フグ(27)	吾智網漁業
小型底びき網		48	43	45	42	45	3.9	258トン(3.9%)	エビ類(44) カレイ類(39) イカ(17) ヒラメ(11) ニベ(12)	
中・小型まき網										
その他の刺網		268	282	263	230	261	22.8	712トン(10.7%)	カニ(64) ニベ(43) カレイ類(123) ヒラメ(25) マダイ(22) エビ(31)	流、底刺網

漁業種類	年度					4ヶ年平均	全体に占める%	4ヶ年平均の漁獲量	主な対象魚種(トン)	備考
	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	4ヶ年平均					
その他の敷網	35	27	24	16	26	2.3	90トン(1.4%) (3ヶ年平均)	フグ(27)	平成8年イカが突発的にとれた(アンコウ網)	
大型定置網										
小型定置網	5	6	4	4	5		44トン	ボラ(9)		
はえ縄	87	83	73	69	78	6.8	920トン(13.8%)	アマダイ(210) キダイ(117) フグ(40) ニベ(29)	東シナ海に出漁(連子縄)	
イカ釣	28	28	29	35	30	2.6	2,196トン(33.0%)	スルメイカ(2,076)	壱岐・対馬海区へ出漁	
その他の釣	380	373	382	290	356	31.1	164トン(2.5%)	ヒラメ(21) スズキ(13) マダイ(11) ボラ(11) ニベ(9)		
採貝	260	235	226	163	221	19.3	1,064トン(16.0%)	アサリ(935)		
採草	3	3	4	1	3		46トン(1.0%)	ワカメ(27) ヒジキ(19)		
その他の漁業	126	90	105	101	106	9.2	720トン(10.8%)	タコ(452) カニ(46) イカ類(148)	かご漁業 つば漁業	

経営体数 1,146 総漁獲量 6,659トン

## 8) 五島海区

長崎県の西方、東シナ海にある日本最西端の列島で、南西から北東に並ぶ、福江、久賀、奈留、若松、中通の五つの島と、200余の属島からなり、総延長90km、総面積は636.67km<sup>2</sup>ある。海岸地形は断層、沈降運動の結果、複雑なりアス式海岸が多く、対馬暖流の影響を強く受けており好漁場に恵まれている。日本の西端に位置するため大陸に最も近く、上代遣唐使の寄港をはじめ、倭寇の根拠地とし古くからの歴史をもち、永正年間(1504~1521年)以降、五島氏によって明治2年(1869年)まで支配された。

表3.1, 3.2より五島海区は大型定置網、小型定置網、その他の釣など、3つの漁業が8海区の中でそれぞれ1位を占め、2位にひき回し船びき網、その他の刺網、はえ縄、3位に中・小型まき網、イカ釣、4位に採草などがあり、県下でも漁業の盛んな海区である。

表3.11より、この海区で経営体数の多いものはその他の釣で全体の37.6%、イカ釣23.2%、その他の刺網15.3%、小型定置網6.1%となり、これら4漁業種で82.2%を占めている。

漁獲量からみると、総漁獲量39,798トンのうち中・小型まき網が24,356トン(総漁獲量の61.2%)、小型定置網が5,273トン(同13.2%)、大型定置網が4,101トン(同10.3%)で、中・小型まき網と定置網で84.7%を占めることから、本海区を特徴する漁業としてはこの2漁業種があげられる。

五島藩は天正15年(1587年)、豊臣秀吉の島津征伐の折に本領を安緒されてより、寛文元年(1661年)富江分地が行われ、有川湾を境に有川は福江領、魚目は富江領となるが、両藩共に農産物の生産が少なく、財政上漁業生産への依存が高かった。そのため、殖産政策として対馬海区とは異なり、積極的に献金を受けて先進地の漁法と漁民を中広く受け入れた。また、加徳網と称し、村の代官や庄屋などの役付き者には、藩から漁業権を与え、その身分を加徳士とし、知行として世襲させ、その漁場を加徳漁場と呼んだ。領内諸浦には、郷支配の加徳網代ばかりでなく、浜方が共同利用する漁場も存在したが、これら浜百姓が営む漁業は、釣、はえ縄、磯建網、採貝などの小漁、雑漁に限られ、優良漁場は殆ど特権階級に占められ、他国人でも藩に大金を献上すれば網加徳が得られた。

福江、富江藩の基幹の漁業は、藩政の初~中期は、寛永3年(1626年)紀州湯浅からきて五島捕鯨の始まりとなった有川式捕鯨業、中~後期はイワシ網とマグロ大敷網、幕末(1867年)は、貞享3年(1686年)に紀州より伝わり奈良尾、富江、玉の浦で盛んであったカツオ釣漁業があげられるが、捕鯨業は鯨の回遊の減少から企業的に成りたたなくなり、藩政の終焉と共に終り、カツオ釣漁業もカツオの回遊経路の変化に伴い大正初期(1913年)頃には消滅した。

五島におけるイワシ網の歴史は古く、永正年間(1504~1521年)玉の浦の乱の折、五島盛定が和泉佐野の漁船に助けられてより、その功で小値賀の斑島、中通島飯の浦、福江の赤島などに佐野漁民の集落ができており、イワシ、キビナゴ地びき網が行われていたと思われる。天正年間(1573~1585年)に播州赤穂の大弥九郎が佐尾にきてイワシ漁をしたとあり、慶長年間(1596~1615年)青方で紀州出身の道津、法村両家による地びき網、八田網の操業、同時期紀州広浦より奈良尾に八田網での通漁がみられている。その後八田網より縫切網にかわり、明治33年(1900年)新型の双手巾着網が開発されたが、五島ではまだ縫切網操業を続けていた。明治40年(1907年)に行われた橘湾の有喜、江の浦巾着網船団の五島灘出漁に刺激され、明治43年(1910年)岩瀬浦に、大正2年(1913年)奈良尾に導入された

が、開発10年後と導入は遅かったが、五島では一番早かった。大正11年（1922年）には大羽イワシを対象とする改良片手巾着網が開発されたが、奈良尾では昭和初期（1927年）に導入され今日に至っている。

五島の定置網漁業の歴史は古く、一説によれば、寛永3年（1626年）山口県豊浦郡湯玉で開発された湯玉大敷網を、湯玉の人新屋長兵衛が五島玉の浦に初めて敷設し、サバの大漁をみたとするものと、明暦2年（1656年）同じ湯玉の人山本惣左衛門が魚敷網を考案し、万治2年（1659年）その子勘兵衛が五島玉の浦に敷設し、その後平戸に漁場をかえて操業したとの説がある。湯玉式大敷網はイワシ、アジ、サバ、イカなどの小魚をとる小型の大敷網であったので、五島独自にマグロを対象とする五島敷が、明和4年（1767年）三井楽で発明され、天明4年（1784年）頃には五島のマグロは全国的に有名であった。文化年間（1804～1818年）には五島のマグロ網は、先進地であった長門（山口県）、杵岐、対馬、伊予、土佐、筑前、薩摩地方に伝わり、その後、漁獲対象をブリにかえ今日に至っている。

これらのことから、この海区を特徴付ける漁業として、中・小型まき網漁業と定置網漁業があげられる。

表3.11 平成7～10年の4年間の平均経営体数と対象魚種（五島海区）

漁業種類	年度	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	4ヶ年平均	全体に占める%	4ヶ年平均の漁獲量	主な対象魚種（トン）	備考
地びき網		1	0	0	0	0				
ひき回し船びき網		12	13	14	12	13	1.0	542トン(1.4%)	トビウオ(526)	
ひき寄せ船びき網										
小型底びき網										
中・小型まき網		12	11	11	11	11		24,356トン(61.2%)	マアジ(11,702) ウルメ(2,548) カタクチ(2,369) ムロアジ(138)	
その他の刺網		375	374	359	293	350	15.3	1,402トン(3.5%)	イセエビ(42) マダイ(27)	
その他の敷網		0	0	0	1					
大型定置網		19	20	20	18	19	1.0	4,101トン(10.3%)	サンマ(679) ソウダガツオ(363) イカ類(1,092) ブリ(345) マアジ(233)	
小型定置網		148	144	139	125	139	6.1	5,273トン(13.2%)	イカ類(2,090) サンマ(736) ブリ(316) ソウダガツオ(386) マアジ(171) トビウオ(197)	
はえ縄		139	138	132	102	128	5.6	588トン(1.5%)	マダイ(36)	
イカ釣		579	542	545	450	529	23.2	800トン(2.0%)	スルメイカ(305) その他のイカ(494)	
その他の釣		908	883	834	813	860	37.6	683トン(1.7%)	マダイ(160) ブリ類(74) マグロ(11)	ひき縄990トン(2.5%) マグロ(668トン) ブリ類(42トン) ソウダガツオ(35トン)
採貝		102	105	121	146	119	5.2	171トン	アワビ(50) サザエ(121)	
採草		32	25	11	16	21	1.0	428トン(1.1%)	ヒジキ(285)	
その他の漁業		101	102	113	66	96	4.2	464トン(1.2%)	貝類(21, 内サザエ13) タコ(264) ウニ(139)	

経営体数 2,285 総漁獲量 39,798トン

### 総括（表3.3参照）

#### 1) 対馬海区

漁獲量からみて、釣漁業、まき網漁業、定置網漁業があげられ、釣漁業の中ではスルメイカを主とするイカ釣と、ブリ類を主とするその他の釣、経営体は少ないが漁獲量ではサバが50%近くを占めるまき網と、イカ類を主とする大・小型定置網漁業が代表される漁業である。

#### 2) 杵岐海区

位置的に対馬と同じ海域であるので、対馬と全く同じ形態を示しており、スルメイカを主とするイカ釣と、ブリ類を主とするその他の釣、イカ類を主とする大・小型定置網が代表される漁業である。

#### 3) 北松海区

この海区は沿岸の各種漁業に適した漁場に恵まれて、漁業種類の多さは県下一である。その中で、漁獲量からみてカタクチイワシを主とする中・小型まき網と、サンマ・イカ類を主とする大・小型定置網が代表される漁業である。

#### 4) 大村湾海区

この海区は閉鎖型内湾漁場のため生産性は低い。漁獲量、経営体数からみて、漁獲の55%近くをナマコで占める小型底びき網と、カタクチイワシが100%を占める中・小型まき網が代表される漁業である。

#### 5) 西彼海区

この海区は沿岸水と外洋水とが混ざりあう海域で、マアジを主とする中・小型まき網と、イカ釣漁業が代表される漁業であるが、対馬、壱岐海区のイカがスルメイカ主体なのに対して、イカ釣の漁獲の93.1%がアオリイカやケンサキイカである。

#### 6) 橘湾海区

西彼海区と同様に、沿岸水と外洋水とが混ざりあう海域であるが、西彼海区にくらべて長崎半島、島原半島、天草島、に囲まれた湾形をなし、かつ海底も平坦な海域のため、エビ類を主とする小型底びき網と、カタクチイワシを主とする中・小型まき網が代表する漁業である。

#### 7) 有明海海区

この海区は長崎、佐賀、福岡、熊本の4県に囲まれ、湾奥は内湾性海域で遠浅砂浜海岸が続き、入口部は外海水の影響を受け、干満差が5～6mと大きいことから、潮流の早い海域である。この漁場特性から、アサリを主とする採貝と、潮流を利用した流刺網や、カレイ類を主とした底刺網が代表する漁業である。

#### 8) 五島海区

対馬暖流の影響を受け、リアス式海岸が多く好漁場に恵まれている。漁業種類も北松海区に次いで多いが、マアジを主とする中・小型まき網と、イカ類を主とする大・小型定置網が代表する漁業である